



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

★次号も読んでもいいかな? と思った方は、メールでご連絡下さい。

「シク教3 エネルギーがやって来た！」

大女優たちは、南インドのリゾート地（コヴァーラム・ビーチ）でアーユルヴェーダ体験などをしてゆっくりする手筈であった。その後にデリーでわが輩と合流しパキスタンに向う予定になっていた。

ところが着いたとたんに、宇宙のインスピレーションを受け、330キロも離れた南インド最大の聖地マドゥライに行ってしまったのである。車移動で七時間もかかる。

（車の中でゆっくりするのかな？ できないね）

その話は大女優のエッセイ（朝日新聞掲載）を読んでいただくとしよう。

大女優は稽古があるというので南インドから直接帰国してしまった。わが輩とは会えなかった。残念至極。

（実はホットとしたよ）

これは後日談なのだが、わが輩は突然の行程変更は大女優の気まぐれだと思っていた。それは軽い誤解だった。次なるストーリーを読むと、読者諸氏はこの本質を知るのであろう。

さて、われ等と先発隊はデリー空港で合流した。大女優は帰国したが、シャクティ女優は残っていた。シャクティは「性力」の意味である。身体下部の会陰から頭頂に抜ける強力な内的エネルギー（クンダリーニ）のことである。女性名詞なので彼女にふさわしい仮名だと思う。実際彼女には驚くべきパワーがあった。

「は～い。大魔王さ～ん、初めまして！」

100メートル先からでも感じるようなエネルギーが小走りでやってきた。

（美しい！ でも、なんとなく危険？）

それはそれとして、我らは印パ国境の街アムリットサルに飛び立った。

これからは緊張の国境越えである。

アムリットサルには以前に来たことがあるが、国境を“見学”したことはない。両国を隔てる一本の境界線や殺風景な柵を眺めてどうするの、と思う読者諸氏よ。

印パの国境ではアトラクションがある。夕刻に門が閉じられるとき、両国の国旗が降ろされる。そ

のときの競い合う兵士の儀礼がなかなかの見ものだと言っている。両サイドには観覧席が設けられている。

両国民が熱狂するというのだが、われ等は午前中に通過するために残念ながら見る機会はなかった。

実は、渡印前にインド映画「ミルカ」のDVDを観た。主役のミルカは一九六〇年ローマ・オリンピック陸上競技で期待された金メダルを逃してしまった。ゴール直前に振り返ったからである。なぜ、振り返ったのか？（結末はDVDを観てください）

この映画は短期間で打ち切られてしまった。どうやら観客動員数が少なかったようなのである。

本当のことを言うと、わが輩も映画館で観るのを躊躇った。暑苦しいヒゲをはやした男、それにランナーがテーマでは退屈極まりないと思ってしまった。しかし「ミルカ」は見るに値する優れた映画であった。

「必要は発明の母」、いや「必要は知識の母」で、わが輩にはシク教の知識の補充が必要であった。そこで旧知の映画評論家にDVDを借りたというわけである。

ミルカはシク教徒で、独立以前はパキスタン領に住んでいた。分離独立の時の大虐殺を乗り越えてインド側に逃げ延びてきた。この国境を越えてである。イスラーム教徒はヒンドゥー教徒に殺され、ヒンドゥー教徒はイスラーム教徒に殺された。シク教徒も殺された。そのような悲惨なシーンをDVDで観たこともあるが、印パは常に緊張している。その緊張感がわ輩に影響していることは確かである。

国境線を越えてしばらく進むが、振り返ると誰もついてきていない。わが巡礼団は恐れることなく国境の写真を撮りまくっている。

（お〜い、早く来てよ）

「鉄砲の弾があたるまでは大丈夫！」

女傑おばさんは言ったが、大丈夫だろうか。読者諸氏よ。

さあ、いざ緊張のパキスタンへ。